

連載  
講座

第55回

## 行政広報と研修への着眼 —後藤新平—

作家 童門冬二

### 板垣退助にヒントが

率直に云って後藤新平に「政府広報」と「内部研修」の必要性を、改めて感じさせたのは、皮肉なことに、かれが名古屋病院長として診断した“板垣退助暗殺未遂事件”だった。

というよりも板垣自身のアクターだった。

板垣は新平の診断が済むところ云った。

「板垣死すとも自由は死なず（じ）」

傷は死を招くようなものではなかったが、この名ゼリフはウケた。

新聞にデカデカと載り、日本全国に知られた。新平ははじめて新聞の力を知った。今までは、余り知力の高くない、いわば大衆とよばれる層の、興味本位の記事を伝える媒体と思っていたのが、実際には“政治を動かす力”を持っていたことを、まざまざと教えられたのだ。

(オレのまちが이었다)

新平は率直にそう感じた。事業計画の説明も政府省庁内への説得に主眼をおいて、外部のいわゆる大衆とよばれる層への働きかけはほとんど力を注がなかった。

この層が意外な反応力を持っていることを見逃していたのだ。自分の計画が国家的意義のあることに重点をおいて、長屋に住む八つつあんや熊さんなどの、落語的人物たちとどうかかわるのか、それを伝える「新聞」の存在をキチンと認識していなかったのだ。

今風にいえば「パブリシティの欠落」だ。

新平は過去を反省した。そして、

「これからは新聞を伝え手として大事にしよう」と心を改めた。

板垣事件の報道は、自由民権運動に新しい火力を注ぐタイムツになった。官憲が断圧に出るほどそのいきおいを増した。

脇でみていて、新平は、

「この勢いがオレの計画指示にあったなら」

と悔やまれるのだった。

内容をやさしく丁寧に親切に説明すべきは国際や関係者だけではない。名もない草の群れといていいような存在が、予想もしない反応を示すのだ。

それともうひとつ。新平の計画がその都度“大風呂敷”といわれて潰される過程には、意外なほど省庁の職員が参加していた。

### 復興局の複雑性

東京の復興を震災後に“新首都建設”としてブチあげた時も、新平はこのことをイヤというほど知らされた。

しかしムリはなかった。復興局は各省庁からの出向者の寄せ集めだ。かれらの母体（本拠）は出身省庁にある。復興が済めば鳥のように古巣へ戻っていく。ならばそこにも帰れる場所を確保しておかなければならない。

職員としてロイヤリティ（忠誠心）はどっちにウエイトがおかれるか。

「そんなことは決まっていますよ」

俳句をつくる東京市役所の助役が笑って云った。「それは古巣の上役に決まっていますよ。私だってそうするでしょう」

「このヤロー、これだけ面倒をみてやってるのに」

「その感覚がいけないんですよ。ヤクザの世界じゃないんですから。面倒をみたとかみないとかの論議はやめましょう」

「どうすればいいんだ？」

「研修でしょうね。とにかく共通の認識を持って同じスタートラインに立つことが大事です」

「いいことをいうね。オレみたいなのをよく見捨てずに」

「面倒をみてますよね」

この助役を新平は復興時の東京市長にした。新平自身は復興院長だ。

意見に従って研修を強化し、

「同じ認識で同じ床に立とう」

と力説したがなかなか同じ床に立たない。

逆に新平が、

「ここだけの話だぞ」「話すのはおまえたちだけだぞ」

と他言を禁ずるひみつ事項が、スイスイと大手を振って他へ漏れて行った。

## 耳できく文章を

このころ新平によって思わぬ仕事が二つとびこんできた。ひとつは「少年団」の団長になったことであり、もうひとつは「東京放送局」の総裁になったことだ。

新平にはどんなに叩かれても不屈の<sup>た</sup>起ち上がり根性がある。それは“子供ごころ”と叫びたい。落語のどんなことにも「どうして?」「なぜ

なの?」と原因を問いつめる探究心だ。この性癖は子供特有のもので、大人になってからもそれが“調査魔”といわれるようになった。しかし何といわれようと、かれは計画実行の前には必ず調査をおこなった。

だから少年団の団長になった時も、情的な面よりも知を重んじる、いわば“考える少年団”をめざした。

東京放送局の総裁になった時は、紙から電波という新しいコミュニケーション手段におどろいたが、そのおどろきはすぐねじふせた。アナウンサーによるニュース放送をききながら新平は、ウンウンとひとりうなずきながら、

「新しい文体が要るな」

とつぶやいた。新聞は紙に印刷され、“読む”ことによって情報を手にする。しかし放送はちがう。耳できいてアナウンサーの伝えることを消化する。

そうになると新聞の、

「読んで」という“眼”による摂取ではなくなる。“耳”の登場だ。

「聴いて」理解するのだ。

したがって放送文も、

「耳できいて理解する」ということになる。いままでの文学臭がぷんぷんと漂うような放送ではダメだ。

「耳できいて理解する新しい文章を考えてくれよな」

アナウンサーの溜りに行くと必ずそんなことをいってアナウンサーたちをマゴつかせた。

「総裁は何の冗談を云っているのだ？」

と、冗談ではなく新平にすれば本気だった。かれにとっては“新しい武器”ができたのだ。“きいてわかる放送文”は新しい<sup>たま</sup>弾丸だ。

「時代はどんどん変わる。人間も変わらなければ」愛宕山の放送局に立って新平はつくづくそう思うのだった。